

### Ⅲ 本県における教育の情報化の推進に当たって大切にすべき視点

#### 1 児童生徒の力を育む手段としてのICT活用

##### (1) 児童生徒の資質・能力の育成のためのICT

ICTは、これからの社会において必要不可欠な「文房具」となるものであり、これまで容易でなかったことや想定できなかったこと等を実現可能にするものです。また、ICTを日常的に活用することが当たり前になる中で、児童生徒がこれからの社会で生きていくために必要な資質・能力を身に付けていくためには、学校生活のみならず、家庭においても、学習や自己の問題解決のために、日常的にICTを活用できる環境を整備し、活用していくことが不可欠です。

一方、ICTはあくまで「ツール」であり、活用すること自体が目的化してはいけません。学習指導要領において、児童生徒に「何を教えたか」でなく、児童生徒が「何ができるようになるか」という視点が重視されているとおり、ICTは、児童生徒が必要な資質・能力を身に付けていくための手段となるものです。また、GIGAスクール構想の目的は、学校で行われている教育実践とICTのベストミックスを図ることでより一層の授業改善を図り、多様な児童生徒を誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力を一層確実に育成することにあります。

そのためには、これまでの「教師が使って指導する」だけではなく、「児童生徒に使わせて学ばせることで、児童生徒にICTを使って学びを深めたという実感をもたせる」必要があり、児童生徒自身がICTを活用しながら自らの学びを深める姿を共有するなどして、教師主導のICT利用から児童生徒主体のICT活用へと、教師が自らのマインドセットを変革していくことが重要になります。

##### (2) これまでの教育実践とICTによるベストミックス

ICTは、これを使えば直ちに児童生徒の資質・能力が育成されるというものではありません。これまでの教育実践がそうであったように、重要なことは、授業で児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、そのためにはどのような授業をすればよいか、より効率的・効果的に改善できる部分はないかと考え抜くことです。

こうした授業改善に向けた不断の探究心を教師自身の資質向上の中心に据えることが重要であり、そこに、ICTの視点を加えることが求められます。例えば、全員で「振り返り」を共有したい、全員の理解度を確認しながら授業を進めたい、全員の意見を効率的に集約したいなど、授業改善に向けた強い目的意識の下で、ICTを活用できないかと試行錯誤することが大切です。ただ単に、授業の全てで端末を活用したり、これまでの指導方法をICTに単純に置き換えたりするということではありません。

デジタルかアナログかといった二項対立ではなく、児童生徒に何を身に付けさせたいかという視点から、実践と研鑽を重ねていく必要があります。特に、これからの教師には、児童生徒に「学び取らせたいこと」を意識した上で、ICTの活用も含めた「学ばせ方」を考えることが求められます。そして「個別最適化」の観点から、それぞれの児童生徒の「学び」をいかにコーディネートするかという視点が求められます。

##### (3) ICTの活用に積極的に取り組む姿勢

しかし、これまでのICTを活用した教育実践の有無等により苦手意識をもつ教師がいるのも事実です。また、ICTにどのような可能性があるか等については、実際に使用したり、教わったりしないと分からない面も多くあります。このため、初期段階においては、多少なりとも「まずはやってみる」という姿勢をもつことも重要です。また「〇〇できた」という多様な実践を共有するといった姿勢も重要です。

その上で、児童生徒に必要な資質・能力を効果的・効率的に身に付けることができたかどうかを振り返り、次の実践の改善へとつなげてといった教師自身がPDCAサイクルを積極的にまわし、主体的・対話的で深い学びを展開していくことが大切です。

## 2 「リアルな体験」と「つながる経験」とのベストミックスを生み出すICT活用

### (1) リアルな体験の重要性

Society5.0時代は、情報技術が高度に発展し、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）が融合されたシステム等により、経済発展と社会的課題の解決を両立する時代であるとされています。こうした社会で夢や希望を実現していくためには、学校においてICTも積極的に活用した学習等を行い、児童生徒に、情報活用能力を含む学習指導要領で求められる資質・能力が確実に育まれていくようにすることが重要です。

一方、こうした時代にこそ、人と人とのつながりや、体験活動等によるリアルな経験が価値を有するようになってきます。特に、学校は、人と人との関わりにより全人的な発達を保障する場となるものです。ICT環境の整備が急速に進み、ICTを活用した授業等が多く展開されるようになったとしても、学校のもつこうした価値が変わるものではありません。このことを意識した上で、学校においては、これまでと同様に、対面による指導や児童生徒同士の学び合い、地域社会での多様な体験活動等にも、積極的に取り組んでいく必要があります。

体験活動は、幼少期から青年期まで、多くの人と関わりながら体験を積み重ねることにより、「社会を生き抜く力」として必要となる基礎的な能力を養う効果があるとされています。社会で求められる仲間とのコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、創造力、異なる他者と協働する能力等を育むためには、様々な体験活動が不可欠です。

また、体験活動は、自分自身との対話、実社会との関わり等を考える契機となります。例えば、自然の中で、これまで触れたことのない物に触れながら、その存在を認める経験を積むことなどは、大人になったときに、思いどおりにならない状況に直面したときにも対応できる力が付くと期待されています。

交流や体験活動等は、こうしたいわゆる「非認知能力」を育成する上で非常に有意義な活動となるものですが、本県には、こうした力を育成するに当たり、全国有数の土壌が整っています。前述のとおり、本県は離島・へき地を多く有し、南北600kmにわたる県域を有しています。これにより、各地域に豊かな自然や日本の近代化をリードした歴史、地域に根ざした個性あふれる文化など、魅力的な教育資源が溢れています。また、世界遺産やユネスコ無形文化遺産もあります。これほどまでにリアルな活動を行うのに適する環境を有する本県において、こうした地域資源を学習に使わない選択はありません。これらをフル活用し、鹿児島県ならではの「令和の日本型学校教育」を実現し、数値等では測りづらい部分の資質・能力も含め、児童生徒の力が育まれるようにしていく必要があります。

### (2) 「リアル」と「デジタル」のベストミックス

ICTは、こうしたリアルな体験と相反するものではありません。むしろ、新たな可能性を創出するものとして、積極的に有効活用すべきです。デジタルかアナログか、リアルかネットかという二項対立に陥るのではなく、両方のよさを生かしながら、新たな学びを創造していくことが必要です。

また、ICTの活用により、本県の自然、風土、歴史、文化等とより主体的にかかわり、情報の収集や分析、表現、発信していくことも可能であり、鹿児島の未来を担う人材としては、こうした力を育成していくことも重要です。

例えば、これまでは、離島の文化等について学びたくても物理的な制約により叶わないケースもありましたが、インターネットを活用することで、効率的に情報収集ができたり、離島と遠隔地の児童生徒によるオンライン交流等を行ったりすることもできます。

また、インターネットや動画等により事前学習を行った上で、現地を訪れ、リアルな体験を行うことで、体験活動の学習効果を高めることもできます。さらに、リアルな体験で学んだ成果を写真やプレゼンテーションソフト等を用いながらまとめたり、その成果をインターネット上で世界に発信したりすることもできます。

このように、ICTは、これまでの教育実践と組み合わせることで新たな学びを生み出す可能性を秘めています。今後、本県においても、様々な魅力的な実践が行われることが期待されます。

### (3) 人と人との協働を加速化させるためのICT

一部では、学校教育の急速なICT化が進んだことで、児童生徒がインターネットの世界に閉じこもるようになるのではないかと、対面での交流や人間関係づくりなどに苦手意識をもつようになるのではないかと、等を懸念する声も聞かれます。ICTは、こうした人と人との交流等を阻害するものではなく、むしろ、こうした人と人との協働を加速化させるツールとして、積極的に活用することが重要です。

例えば、各自の興味関心等に応じてICTを活用して調べ学習（個別最適な学び）を行い、これを持ち寄ってグループで議論（協働的な学び）をすると、多様な情報や考え方に触れたり、調べられる幅も広がったりするので、議論も白熱するはずで、そして、議論したことを、学習支援アプリ等を活用して、学級全体で共有すると、これまでは時間の制約等の関係から一部の意見しか拾えなかったものが、新しい視点や気づき等までも拾い上げて議論することが可能になります。その後、また議論した内容をもとに、各自でICTを活用しながら整理したり、調べたりする（個別最適な学び）ことも可能になります。

このように、ICTは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の好循環を創り、これを加速化させることができます。

### (4) 「つながる」道具としてのICT活用

以上のように、ICTは、より積極的に、人や自然、文化等と「つながる」ための道具として活用されることが期待されます。

本県には、かつての郷中教育の精神や、今後、ICTを活用した異学年交流なども考えられます。また、離島・へき地の学校においては、遠隔教育システムを使ったオンラインでの交流等も可能になり、さらには、県外や海外の方と交流することで、児童生徒の将来のキャリアパス等に良い影響を与えることも期待できます。

このほか、本県には山村留学等など、地域の自然や文化を生かした魅力的な教育活動を行っている学校が多くありますが、それらを、ICTを活用して積極的に発信することで、人やモノの流れを双方向化し、活性化させることで、地方創生に資する可能性もあります。

ICTの活用により、「つながり」、交流や体験活動等を加速・充実させていくといった視点が求められます。

### 3 互いの学び合いによるICT活用指導力の向上

～1人の100歩ではなく「100人の1歩」の積み重ね～

#### (1) 教職員も「誰一人取り残さない」

本推進プランの目的は、県全域で等しく質の高い教育を受けられるための環境整備にあります。その意味では、教職員による教育実践がそうであるように、誰か1人だけがその道を100歩進めばよいというものではなく、100人がすべからず、前に進み続けることが大切です。

そう考えると、教育の情報化の急速な進展等による学びの大きな変革期において、教職員についても「誰一人取り残さない」ようにすることが大切です。児童生徒を導くのは教師であり、「教師が取り残されること」は、「変革すべき過去のままの教育実践に児童生徒が取り残されること」を意味します。

鹿児島教育DXは、一部の教職員でなく、全ての教職員により行われるべきものです。全ての教職員のマインドセットを変え、学びの変革を推進することで、夢や希望を実現し、未来を担う鹿児島の人づくりに取り組んでいく必要があります。

一方で、教育現場におけるICTの活用は、教育データの利活用による効果的且つ効率的な指導の充実や校務の軽減や効率化等といった教職員の働き方改革につながる側面でも期待されています。

これまで時間や手間をかけなければできなかったことが、ICTを活用することで、短時間で済ませることも可能となります。操作方法を覚えなければならないことに最初は手間を感じることもあるかもしれませんが、慣れていくことで手間はそのうち手間ではなくなり、効果をしっかり感じるようになるはずです。

#### (2) 鹿児島ならではの文化・風土を生かした教え合い・学び合い

しかし、これまでのICTを活用した教育実践の蓄積の有無等により苦手意識をもつ教職員がいるのも事実です。そしてICTにどのような可能性があるか等については、実際使ってみたり、教えてもらったりしないと分からない面もあります。

その意味において、学校にICTの得意な教職員がいることは望ましいことです。大切なことは、一部の教職員が自分のスキルを高めていくのではなく、そうした教職員が各校のリーダーとして、獲得した知識・技能を学校全体へと積極的に展開していくということが求められます。また、ICTに苦手意識をもつ教職員は、積極的に学ぶ姿勢が求められます。さらに、管理職については、そうした教え合い、学び合いが積極的に生まれる同僚性が発揮できる職場環境を醸成することが重要です。

本県における郷中教育の精神に学び、互いを助け、学びつつ教え、また、教えつつ学ぶといった姿勢が大切です。その点、本県は、県内全域による人事異動もあり、教職員間の交流も盛んです。また、こうした県内全域による人事異動により、本県の教職員には、特定地域のみ依存するのではなく、県全体の教育のことを考える姿がよく見られるとの声もあります。

令和の時代、学校教育も大きな時代の変革期にあるからこそ、本県の教職員、そして各市町村教育委員会、県教委が連携・協力し、学びの変革を推進していくことが必要です。概して、こうした新しい取組の移行時期におけるばらつきは、大きな差となって現れるものであり、学校教育の場合、これが児童生徒間の学習環境の格差につながります。このため、鹿児島教育DXを県全体で進めていくためには、誰もが取り残されない形で、県全体で推進していく必要があります。

これには、学校種を超えた連携も重要です。小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校の全ての教職員が連携を図り、鹿児島の児童生徒の将来を思い描きながら、時代に相応しい学習環境や学びを等しく提供していくことが求められます。

県教委としても、本県の特徴である県域教育用アカウントも活用しながら、多様な教育実践をつなぎ、誰もが取り残されない形で、新たな学びの変革へとつなげていきます。そして、教え合い、学び合い、高め合う文化を大切に、県全体で児童生徒の学びを支えていきます。「教育の情報化」の歩みが、1人の100歩ではなく、「100人の1歩」の積み重ねとなるよう取り組んでいきます。